かながわ歴史 亀さんぽ

神奈川の歴史～神奈川宿と神奈川湊～

神奈川宿は、東海道五十三次のひとつで、日本橋から三番目の宿場です。この地名が、県の名前や区の名前の由来になりました。江戸時代には、港湾都市(湊)としても繁栄し、洲崎大神の前あたりは海で、その沖の海面に弁才船(大型の木造帆船)が泊まり、そこから小さい船で荷物を陸に運んで、神奈川湊による廻船問屋の蔵に荷物を収めていました。

「横浜絵図　神奈川部分」東京都立中央図書館特別文庫室蔵、(公財)横浜市ふるさと歴史財団写真提供

「五十三次名所図会 四 神奈川(初代広重)」横浜市歴史博物館所蔵

東神奈川駅

東神奈川駅自由通路東口側には、「東海道五拾三次之内 神奈川 台の景」(歌川広重)の浮世絵パネルが設置されています。絵の右側は茶屋が立ち並ぶまちなみが、左側は船の行きかう湊の様子が描かれています。

神奈川区に伝わる浦島太郎伝説

昔、浦島太郎という人がいました。ある日、太郎が海で釣りをしていると、大きな亀が釣れ、その亀は乙姫になって太郎を竜宮城へと連れていきました。竜宮城は、とてもきれいで楽しい場所でしたので、太郎は時が経つのを忘れてしまいました。太郎が家に帰ることにしたところ、乙姫は別れを悲しみ、太郎に玉手箱と観音ぼさつを授け、「けして玉手箱をあけてはいけません」と言いました。帰ってみると、父母がいません。乙姫から授かった観音ぼさつに、父母に会わせてもらいたいと祈ったところ、観音ぼさつが「お父さんのふるさとに私をおぶっていきなさい」と言いました。太郎が父のふるさとを訪ねると、あれから何百年もたっていることが分かり、太郎の9代あとの子孫が「あなたの父母の墓は横浜の神奈川にありますよ」と教えてくれました。太郎が横浜の神奈川に向かうと古いお墓を見つけ、太郎は悲しみで泣きました。太郎は小さなお堂を建てて、玉手箱と観音ぼさつをおさめました。ある年、神奈川の海で、漁師たちは金色の亀に乗った太郎と乙姫に会いました。「どうか、みなさんの願いをかなえる観音ぼさつをおまつりしてください」と言って、太郎と乙姫は光の中に消えていきました。このあと、観音ぼさつは「浦島観音」と呼ばれ、そのあともずっと大切にされました。

41 蓮法寺

浦島巨の蓮法寺には浦島太夫・太郎親子の供養塔や竜塚の碑があります。

42 成仏寺

太郎が父母の死を知り悲しみ、石にこしかけて泣いたため、涙のあとが残ったとされている涙石があります。

43 足洗川の碑

大口一番商店街に建っている碑で、太郎が竜宮城から帰ったときに足を洗ったとされる場所を示しています。

44 浦島地蔵

浦島地蔵は、もとは観福寿寺の入口にありました。寺が火事になり、慶運寺に移そうとしましたが、地蔵をつんだ牛車はピクリとも動きませんでした。人々は、地蔵がよその土地に行くのをいやがっているのだと考え、もとの場所に置くことにしました。

45 慶運寺

浦島丘にあった観福寿寺が火事で焼失したため、浦島伝説にまつわる物がこの寺にもたらされ、それ以来「浦島寺」とも呼ばれています。浦島太郎が竜宮城に行った時に乙姫さまから授かったというぼさつ像や玉手箱などが伝わった、といわれています。

46 うらしま太郎の山車

つりざおと玉手箱を持ち亀にのっている浦島太郎の山車(お祭りのときにかざり物などを付けて引く車)は、年に数回、浦島町浜公園で展示されます。この山車は昭和のはじめにつくられたものですが、当時はおはやしにあわせ、きれいな飾りをつけた牛にひかせていたそうです。

「浦島太郎山車」神奈川区浦島町町内会蔵、横浜市歴史博物館写真提供

浦島太郎の絵本

横浜市歴史博物館オリジナルれきし絵本「よこはまのうらしまたろう」では、神奈川区に伝わる浦島太郎伝説を知ることができます。神奈川図書館や区内の地区センター・地域ケアプラザでご覧いただけるほか、歴史博物館にて販売もしています。

「絵本　よこはまのうらしまたろう表紙」え・たかはしなおこ　横浜市歴史博物館提供

「かめ太郎」は、神奈川区に伝わる「浦島太郎伝説」の亀にちなみ、制定された区のマスコットキャラクターです。